



図書館ホームページ

図書館ホームページURL
図書館公式X(旧ツイッター)アカウント

<https://www.kawaguchi-lib.jp>
@kawaguchi_lib



図書館公式X(旧ツイッター)

わたしの今年の一冊 2024

昨年お読みになった本の中で、印象に残った一冊をご紹介頂く「わたしの今年の一冊」は、今回で29回目となりました。たくさんのご応募をいただきましたが、紙面の関係で21点掲載させていただきます。

『サンショウウオの四十九日』

朝比奈秋／著 新潮社 2024年刊 913.6

久しぶりに純文学らしい作品を読みました。

「我思うゆえに我あり」という言葉が何度も頭を駆け巡りました。自我ってなんだろう？ 思いつてなんだろう？ 私はどこから来たのだろう？ 命とは？ という古来からのテーマを真正面に捉え、読み応えがあります。特に、芋掘りの思い出のシーンは圧巻です。哲学的な思考は科学で解明出来るなんてことはないですね。意思や思いは脳の活動で心は脳にあると思っていましたが、案外、肉体とは別の場所にあるのかもしれないと本気で考えさせられる様な作品です。(50代)

『汝、星のごとく』

風良ゆう／著 講談社 2022年刊 913.6

暁海ちゃんと櫂くん、重すぎるものたちを抱えて生きていた二人の人生。美しい文章で流れるストーリーに浸っていました。

『あなたはいつになったら自分の人生を生きるの？』

瞳子さんの言葉はどれも印象的で、厳しさがあるけれど、これでもかと言うほどの真っすぐな愛を感じるのです。

求めていたものを手に入れたり、永遠に失ったり。”わたしはこれから、どう生きるのだろう”と、読後もしばらく漂ってしまいましたが、いろいろな愛を感じるこの物語を、私は大好きになりました。(30代)

『図説江戸のエンタメ 小説本の世界』

深光富士男／著 河出書房新社 2022年刊 913.5

江戸の小説本の世界が紹介されています。馬琴や京伝の文に北斎や国芳の挿絵の読本がのせられています。華やかで面白くお芝居を見ているようでした。昔の読者になったようで楽しかったです。一部ではなく全文読んでみたくなりました。(60代)

『告白』

町田康／著 中央公論新社 2005年刊 913.6

読了後、そのあまりの衝撃に、一週間以上にわたって打ちのめされた、まさに読み手によっては「猛毒にもクスリにもなる」一冊。

ネットに溢れる無編集のことばの氾濫に惑わされる暇があるのならば本書を読み、一流の作家が描く「救いようのない絶望」の世界に浸り、そこから時間を経ることで独自のカタルシスを体験した方が、より充実した時間を過ごせるはず。やはり「本は凄い」と言わざるを得ない大作。とんでもないものを読んでしまった。(40代)

『6days遭難者たち』

安田夏菜／著 講談社 2024年刊 K 913.6

山岳部くずれの女子高生が、友人の女子高校生2人を低山ハイク日帰りにつれていくが、ふとした心の緩みで遭難という事態に陥る。大人にも当てはまるケースだが、山中の6日間人間として成長する3人に感動する。(60代)

『イラク水滸伝』

高野秀行／著 文藝春秋 2023年刊 292.7

今回高野さんの潜入先は、中東イラクの湿地帯アフワール。メソポタミア文明以来そこに住む水辺の民マアダンは、水牛を飼い、アシの舟で移動する独自の文化や宗教を育んでいるらしい。氏族社会の為、人の伝を伝えて入り込んでゆく手法だが、コロナ渦をはさんでの取材は苦難の連続。世界は広く深い、力作です。(60代)

『配達あかずきん』

大崎梢／著 東京創元社 2006年刊 913.6

配達した雑誌に挟まれてた盗撮写真、入院中に本を選んでくれていた店員は誰だったのか……。成風堂の書店員杏子とアルバイトの多絵が5つの謎を解いていく書店ミステリー。謎解きだけじゃない書店員の仕事や日常が描かれる場面も多く、最後は驚きや温かい結末に、苦手だったミステリーも展開を予想しながら読む5つの物語は面白かったです。(20代)

『白線以外、踏んだらアウト』

田丸雅智／著 光文社 2024年刊 913.6

「三秒ルール」、「痛い痛い、飛んでいけ」、「食べてすぐ横になると牛になる」……一度は聞いたことのある言葉が物語のショートショート集。

変わらない部分もありつつ、新たな設定や予想外な展開がたくさん登場して全10編の作品はどれも結末まで面白かったです。(20代)

『まいまいつぶろ』

村木嵐／著 幻冬舎 2023年刊 913.6

「本屋が選ぶ時代小説大賞」をとった作品。歩いた後には尿を引きずった跡が残るため、まいまいつぶろ(カタツムリ)と呼ばれ蔑まれた君主(家重)がいた。口がまわらず誰にも言葉が届かない彼の側に控え、御口代わりを務めた忠光との感動的な関係が描かれる。そして「もう一度生まれても、私はこの身体でよい。そなたに会えるのならば」という家重の言葉に涙が溢れた。(70代)

『一線の湖』

砥上裕将／著 講談社 2023年刊 913.6

主人公は、亡き母が教えていた小学校で、1年生に水墨画を教えることになる。そこで、子どもたちの中にたったひとり筆を持ち、生き生きとした線を描く子どもに出会う。指で描く画は、「手で触る」ことを覚え、描く喜びに子どもは笑顔を見せてくれる。子どもたちの感性、遊びながら描くことを学んでいく姿がとても愛おしいと思った。水墨画の挿画が随所にあり、「沢蟹」は味があってすばらしいと感じた。(60代)

『「新しい資本主義」のアカウンティング』

スズキトモ／著 中央経済社 2022年刊 336.9

この本を読んで日本の未来を真剣に考え変えようと情熱を持って行動している人がいることを知り、日本もまだ捨てたものではないと日本の将来に対する認識が絶望から希望に変わりました。普段経営と縁のない「理系」の方やこれからどんな会社に就職すればいいか考えている「就活生」に読んで欲しい一冊。(30代)

『老人と海』

ヘミングウェイ／著 越前敏弥／訳 KADOKAWA

2024年刊 B 933.7

ふと目に止まったので、読んでみました。一気に世界観に吸い込まれました。いくつになっても挑戦する事、人間の偉大さ、経験の全てが無駄ではない事、幸せとは何か、様々な事をこの1冊で学べたように思います。ぜひ1度読んでほしいです。(50代)

『かのこちゃんとマドレーヌ夫人』

万城目学／著 筑摩書房 2010年刊 913.6

純粋で元気いっぱいなかのこちゃん(小学1年生)が別れを経験しながら、成長していく物語。玄三郎、マドレーヌ夫人、かのこちゃんの絆に心打たれました。心がぽかぽか暖まる一冊です。(20代)

『月の立つ林で』

青山美智子／著 ポプラ社 2022年刊 913.6

「月は見えない時もそこにある」このことにはっとさせられた。見えないものの存在を信じるということは難しい。でも月に例えられたら実感できたような気がした。月というアイテムが、悲しいまでに恋しさと変化していくことへの必然をあらわしているのだ。この本を読んで、月を見上げるたびに特に月の見えない新月に人の心の有様を考えさせられる。(60代)

『置かれた場所で咲きなさい』

渡辺和子／著 幻冬舎 2012年刊 198.2

「なぜ私ばかり」「もう少し～だったら」つい他人と比べて羨んだり落ちこんだり。私もそんな一人でした。しかしこの本が私に教えてくれました。自分の境遇を嘆いたり人を羨むのではなく、そこで自分ができることをやろう、何もできなくても笑顔でいよう。そうして自分という花を咲かせるのだと。(50代)

『楽園の夕べ』

ルシア・ベルリン／著 岸本佐知子／訳 講談社
2024年刊 933.7

つまらなく見える日々の中にも心が温まる瞬間があるのだと感じさせる短編集だった。

埃っぽい町の中で家族仲がよいとはいえない家に暮らしていても、夜空の流星群を見られるときもある。新月の海辺で、夫が逝ってやっと辛い介護から開放されてよかったと話す老婆。善人でなくてもいいと思える。どんな人の人生にも小さな美しい一面があるのだと俯瞰できた。(60代)

『大吟醸バガボンド』

島内景二／著 樫出版社 2003年刊 B 588.5

日本酒の専門家でもない上に下戸である著者による酒評。東大卒の大学教授ながら嫌味もなく、諧謔にも富む。古典文学専攻だけあって、酒評の比喩は秀逸。製造元に臆することもなく、自己の好みに振り切っているところも、潔く痛快である。(40代)

『この夏の星を見る』

辻村深月／著 KADOKAWA 2023年刊 913.6

東京渋谷の中学生、茨城の高校生、長崎五島の高校生。コロナ禍の真っ最中、様々な制限のある中、自分たちで天体望遠鏡を組み立ててスターキャッチコンテストをオンラインで開催する。天文部や理科部の彼ら、彼女らの工夫や前向きさに感動し、私も夜空を眺めている。(70代)

『介護ヘルパーはデリヘルじゃない』

藤原るか／著 幻冬舎 2019年刊 369.2

ヘルパー歴20年以上の訪問ヘルパーが、様々な利用者宅で見たり聞いたり、体験したりした高齢利用者によるセクハラやパワハラ。利用者の家族にも暴言を吐かれたという。2025年には団塊の世代約2200万人が介護が必要となるのに、ホームヘルパーは約30万人しかいない。その5割が60歳以上という。2025年問題はどのようなのか？(60代)

『九十八歳。戦いやまず日は暮れず』

佐藤愛子／著 小学館 2021年刊 914.6

九十歳何がめでたい。の映画を見てこの本を借りました。世代は違いますが、佐藤先生の育った時代背景や、今の生活、とにかくユーモアあふれる文なんです。ご本人はユーモアと思って書かれていないのもいいです。「老い」への怖さがやわらぐし、若い方にもこんな風にお年寄りは考えているんだ。と思える作品です。(40代)

『本心』

平野啓一郎／著 文藝春秋 2021年刊 913.6

「亡くなった母親をAI技術で再現し対話することで、母が生前抱えていた『本心』を探ろうとする」という、近未来的な設定が面白かったです。

決して明るくポップなテーマではないですが、母の生前の記録をきっかけにして、主人公の停滞していた人生が動き出していく様を見て、元気をもらえました。(20代)

このほか、

- 『ぼくの色、見つけた!』志津栄子/作 ●『武家用心集』乙川優三郎/著 ●『生成AI社会』河島茂生/著
- 『流転の王妃の昭和史』愛新覚羅浩/著 ●『忍び寄る闇の奇譚』はやみねかおる[ほか]/著
- 『不夜島』荻堂顕/著 ●『「学力」の経済学』中室牧子/著 ●『エレジーは流れない』三浦しをん/著
- 『南北戦争英雄伝』小川寛大/著 ●『となりの火星人』工藤純子/著 ●『天国までの百マイル』浅田次郎/著
- 『愛するということ』エーリッヒ・フロム/著 ●『きまぐれロボット』星新一/作 ●『王への手紙』トンケ・ドラフト/作
- 『絞め殺しの樹』河崎秋子/著 ●『歌われなかった海賊へ』逢坂冬馬/著 ●『春雷道中』佐伯泰英/著
- 『ひとつむぎの手』知念実希人/著 ●『西由比ヶ浜駅の神様』村瀬健/著 ●『きみの友だち』重松清/著
- 『外科医、島へ』中山祐次郎/著 ●『紫式部の欲望』酒井順子/著 ●『地雷グリコ』青崎有吾/著
- 『青い壺』有吉佐和子/著 ●『香君』(上下)上橋菜穂子/著 ●『あきない世傳金と銀』(13大海篇)高田郁/著
- 『十二単衣を着た悪魔』内館牧子/著 ●『海峡の光』辻仁成/著 ●『成瀬は天下を取りにいく』宮島未奈/著
- 『バッテリー』あさのあつこ/作 ●『友近の思い立ったらひとり旅』友近/著 ●『知覧からの手紙』水口文乃/著
- 『脱露』石村博子/著 ●『フクシノヒト』役所てつや/著 ●『飢餓海峡』(上下)水上勉/著
- 『ジューディ・モードとなかまたち』(シリーズ)メーガン・マクドナルド/作 ●『いいね!』筒井ともみ/さく
- 『りんごの棚と読書バリアフリー』(1~3)りんごプロジェクト/監修 ●『友近の思い立ったらひとり旅』友近/著
- 『ロードムービー』辻村深月/著 ●『花散る里の病棟』帚木蓬生/著 ●『朝と夕』ヨン・フォッセ/著
- 『ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団』(上下)J.K.ローリング/作 ●『キャンピングカーのたび』みねおみつ/作
- 『科学がつきとめた「運のいい人」』中野信子/著 ●『ぱりぱり』瀧羽麻子/著 ●『望むのは』古谷田奈月/著
- 『法廷通訳人』丁海玉/著 ●『カフネ』阿部暁子/著 ●『凶笑面』北森鴻/著 ●『夢十夜・文鳥ほか』夏目漱石/著
- 『狐霊の檻』廣嶋玲子/作 ●『昭和史講義』(1~3)筒井清忠/著 ●『君が残した贈りもの』藤本ひとみ/著
- 『よるのびょういん』谷川俊太郎/作 ●『おれの血は他人の血』筒井康隆/著 ●『猫弁』大山淳子/著
- 『おばけずかん』(シリーズ)齊藤洋/作 ●『妖怪の子預かります』(シリーズ)廣嶋玲子/作
- 『妖怪の子、育てます』(シリーズ)廣嶋玲子/著 ●『しろくまのパーター』にしかわおさむ/ぶん・え

……などの本をご応募いただきました。

紙面の関係で、お寄せ頂いた感想や書名のすべては掲載できませんでした。
ご応募いただきました皆様、ありがとうございました!!



川口市立図書館 連絡先・開館時間

【中央図書館】

☎048(227)7611
住所: 川口市川口
1-1-1

平日
午前10時~午後9時
土・日・祝日
午前9時~午後6時

【前川図書館】

☎048(268)1616
住所: 川口市前川
3-4-27

【戸塚図書館】

☎048(297)3098
住所: 川口市戸塚東
3-7-1

【新郷図書館】

☎048(283)1265
住所: 川口市東本郷
1688

【鳩ヶ谷図書館】

☎048(285)3110
住所: 川口市坂下町
3-16-6

【横曽根図書館】

☎048(256)1005
住所: 川口市仲町
10-16

平日
午前10時~午後6時
土・日・祝日
午前9時~午後5時

【芝園分室】

☎048(269)2241
住所: 川口市芝園町
3-17

平日
午後1時~午後5時
土・日・祝日
午前10時~午後5時